

オンライン英語研修による学修機会拡大の可能性 —マレーシア海外英語実習を事例に—

金子（藤本）聖子

（東洋大学国際学部）

オンライン英語研修による学修機会拡大の可能性 —マレーシア海外英語実習を事例に—

金子（藤 本） 聖 子（東洋大学国際学部）

要旨

グローバル人材育成のため、大学は短期の海外留学・研修プログラムの開発を進めてきた。コロナ禍により海外渡航が制限され、オンラインでの代替手段が急速に整備された。オンライン留学や研修には、時間的・経済的な負担が少ないという利点がある上に、外国語の習熟度は対面と比べて低くないとされるが、その効果を高める方法については十分に検討されてきたとはいえない。本研究では、本学がマレーシアの大学と実施した5週間のオンライン海外英語実習を事例とし、Personal Attitude Construct (PAC) 分析とインタビュー調査を行った。その結果、バディ学生の献身的なサポートに応えようとするのが日本側学生の成長につながっている可能性が明らかになった。オンライン留学や研修は、バディなどの現地側の協力者の関わりや、国内だけでも対面授業の機会を設けるなどの工夫によって、多様な背景を持つ学生の学修経験を高めることに寄与すると考えられる。

キーワード：

海外英語実習、オンライン、バディ、マレーシア、PAC 分析

目次

1. 研究背景
2. 先行研究
3. 海外英語実習の概要
4. 調査方法
5. PAC 分析とインタビューの結果
6. 考察
7. まとめ

1. 研究背景

産学連携によるグローバル人材育成推進会議（2011）は、移動手段や通信技術の発展により、人・物・資金などが容易に国境を越え結びつくグローバル化社会において、そのような社会への対応力を持つグローバル人材になることが求められていると提唱している。同報告書では、海外留学する日本人学生の減少や海外勤務を望まない若手社員の増加を「内向き志向」と指摘しているが、実際は日本経済の停滞、就職活動の早期化・長期化、海外留学経験を評価しない雇用主、奨学金の少なさなど、海外留学者の減少には外部要因も多いことが明らかになっている（太田 2013）。

グローバル人材を育てるためには、大学における受け入れ留学生数を継続的に増やし、教育・研究・社会貢献に国際的・異文化的側面を統合し、大学の活動に留学生や外国人教職員を包摂する「内なる国際化」（渡部 2022）を進める方法もあり得たが、東日本大震災を契機として留学生受け入れ消極論が顕在化し、大学の国際化は日本人の海外送り出しや英語力強化に方向付けられていくこととなった（横田 2013）。2013 年の「日本再興戦略」では海外留学者数を 6 万人から 12 万人に増やすという具体的な数値目標が掲げられ、実際に 2018 年には 11 万人超を達成した。ただしその大部分は学位取得を目的としない短期留学であり、日本学生支援機構（2022）によれば、2022 年度に海外留学を開始した日本人のうち、1 ヶ月未満の留学者は 49%、半年未満まで含めると 78%を占める。

太田（2018）は海外留学促進政策の変遷を振り返り、2009 年ごろから 21 世紀の知識集約型経済に対応できるグローバル人材が概念化され、短期の海外留学・研修の促進を図る制度が作られたことを指摘している。筆者の所属する東洋大学も 2014 年に開始された「スーパーグローバル大学創成支援事業」タイプ B に採択され、派遣留学生数の目標値を掲げ国際化を進めてきた。国際学部国際地域学科では、海外英語実習（Learning English Abroad）を 1 年生の必修科目として 2017 年度より開始した（カリキュラム変更により 2021 年度からは選択必修科目）。集中的な語学学習を通し、4 技能にわたるトータルな英語力の向上を目指すとともに、英語漬けの集団学習環境でコミュニケーション能力の向上を図るものである。

ところが 2020 年初頭からのコロナ禍によって人々の海外渡航を含めた移動は著しく制限されることになり、学生の海外派遣はそのほとんどが実施見送りとなった。コロナ禍で国際教育の学びが不足することが懸念されたが、オンラインでの代替手段を各大学は急速に整備した。上述の海外英語実習も 2020 ～ 2021 年度はオンラインによる実施となった。

2. 先行研究

現地を訪れ実際に人々と交流しながら異文化を体験する醍醐味は計り知れないが、オンラインでの留学や研修は、費用や手続きの負担の少なさ（池田 2021）があり、参加学生

自身も時間的・経済的な負担なしに合理的に学習に取り組めるととらえている（井内 2023）。それでいて、外国語の習熟度は対面と比べて低くならないため（横川 2021）、外国語運用能力をはじめとするグローバル・コンピテンシーを向上させたい学生に新たな留学機会を提供している（渡部・新見 2022）。オンラインによるパブリック・スピーキングの授業は対面に匹敵する、またはそれ以上の学習効果を持つことから（Broeckelman-Post, et al 2019; Linardopoulos 2010）、オンライン留学の参加者はその教養的価値の側面を高く評価している（井内 2023）といえる。これまで様々な理由で渡航型の留学を選択できなかった学生のために、コロナ禍の代替措置としてだけでなく、継続的にオンラインによる海外留学や研修を実施していく（石山 2023）ことが求められているのではないだろうか。

日本学生支援機構（2020）は海外留学支援制度において短期（1ヵ月～3ヵ月）の海外留学や研修における学修の効果を最大限に高める工夫として、事前・事後学修の充実化を挙げている。オンライン留学・研修については、そのメリットについて上述のとおり研究が増えてきているものの、短期かつオンラインによる留学や研修でどのように効果を高めるのかについては十分に検討されているとは言えない。短期間でオンラインという制約を持つ留学形態では、教室内で学友と共に切磋琢磨することもできないため孤立するリスクが高く（仲谷 2022）、いかにオンライン留学の効果を最大限に発揮するのかについて検討が必要である。また留学に関する研究において、主役である学生の視点を取り入れた研究の発展がもとめられている（中橋 2015）ため、本研究では、オンライン英語実習に参加した日本側学生の視点に着目し、個人の体験の構造をより深くとらえられる Personal Attitude Construct 分析（以下、PAC 分析）およびインタビュー調査を用い、オンラインで実施する留学・研修においていかにグローバル人材育成の効果を高めるのかを検討する。

3. 海外英語実習の概要

本研究では、上述の海外英語実習のうち、2021年度第3クォーター（9月下旬～11月上旬）の5週間、マレーシア科学大学（University of Science Malaysia: USM）と連携して行ったオンラインコースに焦点を当てる。同実習は、英語学習で4単位、後述する Problem-based Learning（PBL）で2単位の合計6単位が修得可能である。プログラムの特徴は大きく分けて、①英語学習、②少人数のチュートリアル、③持続可能な開発目標（SDGs）のトピックについての学習、グループでの課題設定、調査・研究、課題解決方法の発表を含む PBL、④文化交流活動、⑤バディとの個別の交流、の5点である。5週間の間、基本的に午前中3時間が英語学習、午後1時間半がチュートリアル、その後 PBL や文化・交流活動を1時間半行うという流れを、平日4日間行った。この5週間のほか、事前に2日間、事後に3日間の学習を教室で対面で実施した。5週間のプログラム中も3日間は対面授業を行った（マレーシア側とはオンラインで接続）。

USM 側は国際交流センターが中心となってプログラムを実施した。英語教員3名の他、

PBL 担当教員 3 名、チューター 23 名、バディ 13 名、その他事務スタッフや IT サポートチーム、特別講師が加わった。研修開始前にバディがマレーシアを体験できる BOX（英語の教科書や文化交流活動に使う民族衣装、バティック製作のためのキットなど、5 週間の実習で必要なもの全てが入っているもの）を準備し、準備の動画を日本側参加者に共有した上で日本に郵送するなど、実習開始前から交流がスタートした。

4. 調査方法

日本側参加学生 30 名のうち、合意が取れた 24 名に対し実習の参加前後に PAC 分析を行った。PAC 分析は内藤（2002）が開発した手法で、半構造化面接と比べ、個人の体験の構造をより深くとらえることができるのが特徴である。調査参加者自身の枠組みを用いてその経験を理解することができ、調査参加者の経験とその解釈は、デンドログラム（樹状図）に基づいているので再現性・信頼性が高い（末田 2001）。オンラインによる PAC 分析の実施に関して、項目の想起やクラスター命名に関し対面実施と異なる特別な傾向は認められないという研究報告（今野 2021）もある。従来の方法では捉えにくい個人の内面に深く迫ることができ、半構造化インタビューよりも調査参加者主導で進められる上、調査参加者の主観に左右されやすいという通常のインタビューのデメリットも軽減している（小澤・坪根・嶽肩 2022）ことから、信頼性が高いと考え採用することとした。

短期海外研修に関しては中川（2013）が、異文化接触が学生にもたらしたアイデンティティの変容を、また渡部（2009）は広く留学や海外研修に関するイメージの変化を、さらに中橋（2015）は、理工系学生の研修参加前後での意識の変化を PAC 分析により明らかにしている。本研究では特に、オンラインによる海外英語実習についてのイメージをテーマとし、研修の前後に同じ連想刺激文（後述）として提示した。

PAC 分析では紙のカードを用いて連想語を記録・提示するが、作業量が多くなり調査参加者が疲れて妥当性の低い回答をしてしまう可能性がある。また、連想語の提示順序を完全にランダムに行うことは手作業では難しい。このため本研究では、土田（2017; 2022a）による PAC 分析支援ツール（PAC-assist）を使用した。さらに 2021 年当時はコロナ禍で一人一人との対面に制限があったため、PAC 分析後のインタビュー（研修参加前後の計 2 回）をオンラインで実施した。PAC 分析は以下の手順で実施した。

- (1) 連想刺激文の提示：調査者が調査参加者に対し、連想刺激文「本英語実習に参加することは、あなたにとってどのような意味を持っていますか」を提示する。
- (2) 自由連想語の入力：調査参加者が刺激文から連想する言葉やイメージを、思いっただけ PAC-assist に記入する。
- (3) 重要度の順位入力：入力した言葉に、調査参加者が重要度順に数字を付ける。
- (4) 比較の開始：PAC-assist の「比較開始」ボタンを押すと、入力した言葉が 2 つずつラ

ンダムに表示されるので、調査参加者はそれらの言葉のイメージの近さを0（似ていない・関連性がない）から10（似ている・関連性が強い）までの間で選ぶ。

- (5) クラスタ分析：(4) までで得られた非類似度行列に基づき、ソフトウェア「R」を利用してクラスタ分析を行い、デンドログラム（階層的なツリー構造）を出力する。
- (6) デンドログラムに基づき、各項目やクラスタに関するオンラインインタビューを実施する。調査参加者がクラスタごとの名前を付ける。
- (7) 調査者による全体的な解釈を行う。

尚、次節で示すデンドログラムの見方について、上部にある数値は非類似度を示すが、その距離よりも結節される対象と順番の相対的な関係が重要である（土田 2022b）。また各連想項目の右側の数値は、調査参加者自身の付した重要順位を示している。

5. PAC 分析とインタビューの結果

調査参加者24名のうち女子は14名、男子10名、学年は1年生13名、2年生9名、3年生2名、またTOEICに換算した英語スコアの平均は研修参加前が584、参加後が622であった。より多様性を持った少数のサンプルからの調査結果こそが重要な共通パターンを生み出す（メリアム 2004）ため、24名の中から性別や学年、英語力などできる限り多様性のある事例を選び、本節では4名のデンドログラムとインタビュー結果を示したい。4名の詳細は表1のとおりである。

表1 調査参加者のうち4名の詳細

仮名	性別	調査時の学年	研修参加前 TOEIC スコア	研修参加後 TOEIC スコア
A	男	1 年	420	695
B	女	2 年	780	-（体調不良により受験なし）
C	女	2 年	550	585
D	男	2 年	525	620

出典：筆者作成

A は事前の連想項目で挙げた「文化の交換」よりは「英語のコミュニケーション能力を向上させる」ことを主要な目的に挙げ、「毎日英語で生活を送ることによる成長」クラスタに含まれる各連想項目の優先順位が高い結果となった。インタビューで聞いていくとその根底には、一般入試ではなく自己推薦入試で入学したため、英語力を周りと比べた際の劣等感があることが感じられた。ハードな日程の英語実習と並行して学内の TOEIC 講座も受講するなど、苦手を克服しようという熱意が伝わってきた。

また A は事前の段階から「バディの学生のために積極的に活動する」を連想項目として挙げており、実習参加前から現地学生との交流に強い期待を寄せていたことが伺えた。

インタビューの直前に USM から届いた Box によってバディが準備してくれたことを感じ取り、相手側も楽しみにしてくれているのだから、英語に自信がないからと黙り込んだりすることは違うと思う、と英語学習に対する意気込みを新たにしていた。

事後のインタビューでは「LINE でいつでも質問していいよみたいなことを絶対返してくれるし、そのサポートに応えるために積極的だったのかもしれない。（中略）彼らの頑張ってくれたことを無駄にしたくなかった」と語った。LINE での質問以外にも、ビデオ通話をつなぎながら食事会や映画鑑賞会をするなど、実際に現地を訪問しているのに匹敵するくらい、長時間をバディとの交流に費やしていたことが伝わってきた。

事後の「毎日のチャレンジによる成長」クラスターに関しては、英語の授業はもちろんのこと、USM 講師による特別講演において、開発経済学など1年生には難解な分野もあったが積極的に発言したことに言及した。また「先輩・友達・マレーシアの友人との関係性」では、1～3年生という学年の垣根を越え、数名の学生とともに実際にマレーシアを訪問する計画を立てていると話した。

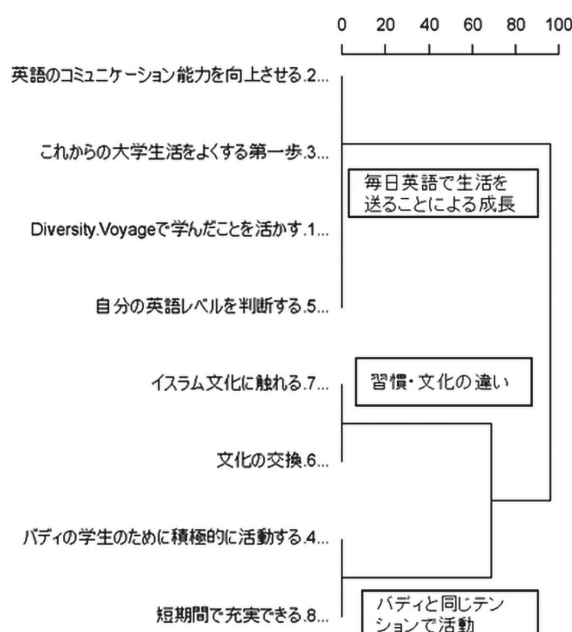


図1：Aのデンドログラム（事前）

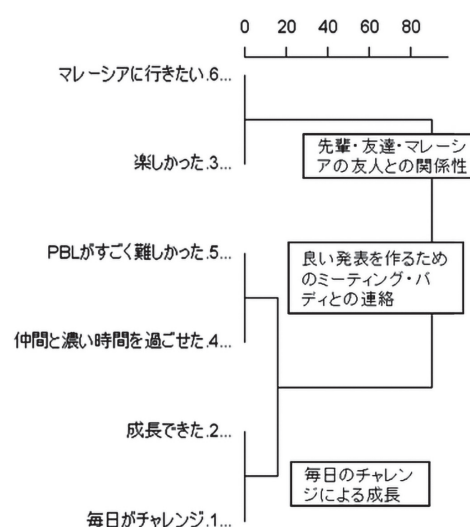


図2：Aのデンドログラム（事後）

さらに、プログラム最後の最終発表会で誰かが英語でスピーチをすることになった際、周りの学生たちがAを推薦したことが一番うれしかったと話した。「なんか僕も最初は刺激をもらう側だったから、与えるって言い方はおかしいかもしれないけど、まあ与える側に、周りからはそう見えてるなら成長したかなって」と語り、支えてくれたバディをはじめとする人々への恩返しとして、今度は逆に自分たちがその役割を果たすため、次年度以降、東洋大学に研修で訪れるグループに対するバディ制度を提案し、企画中だと語った。

Bは幼少期に海外に住んだ時期があり、高校時代にもアメリカとイギリスに短期留学の

経験を有していた。当然、過去の留学経験では現地に渡航しているわけで、それでも「留学をしないと得られないもの」クラスターに関して、マレーシアの発音やコミュニケーションの取り方についての期待と不安を述べた。同じく事前の連想項目「友達を増やす」に関して、ポジティブな要素かと思われたが、インタビューで確認すると「いざこざなく終わりたい」とのことで、日本人同士なら言わなくても伝わるようなことも、マレーシア人としてはもっとフレンドリーに接してほしいととらえる可能性もあるとし、うまく人間関係を構築していきたいのだと語った。

事後の連想項目では「日本で学ぶよりも英語力が向上する」を挙げ、オンラインでの英語実習でありながら「海外で英語を学んだ」という認識でいることが特徴的であった。バディが観光地や普通の街並みを録画し動画にまとめてくれたため、本当に留学している気分になれたという。インタビューでも「寝て起きたらもうパソコンの前に座って英語の授業だったんで、なんかそこまで海外留学と大差ないなって」と述べた。同じく事後の連想項目として「日本・海外ともに友達が増える」を挙げ、大学に入学して2年近くほぼオンラインで授業を受け、他の学生と対面で会う機会が限られていたが、本研修では対面授業や少人数の英語授業によって友人との関わりが深くなったことに言及した。

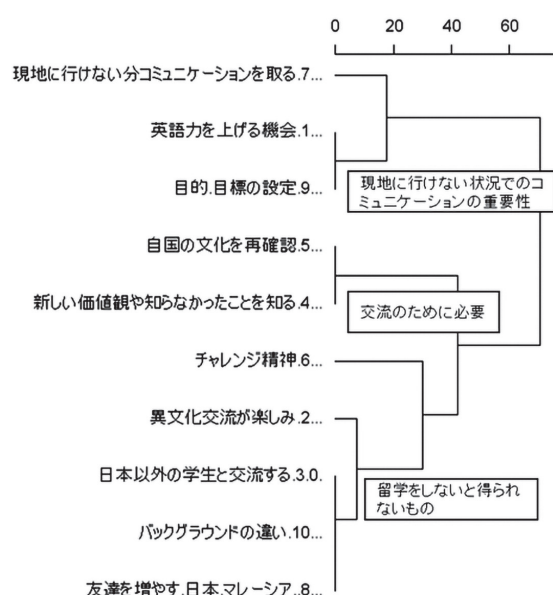


図3：Bのデンドログラム（事前）

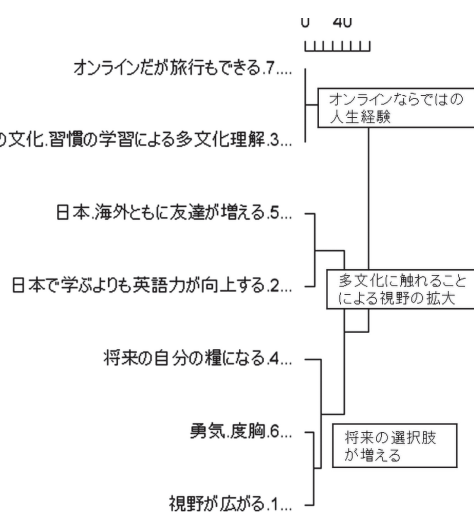


図4：Bのデンドログラム（事後）

前述したほどの海外経験を過去に有していてもオンラインプログラムで得られたものがあるのか事後インタビューで尋ねたところ、「ある意味逃げ場がないので、対面だと場の雰囲気とか、横に友達がいればこう、うまくごまかせたりするじゃないですか。でもオンラインだともう、みんな黙ってて、ちゃんと最後まで話し切らないといけなかったりしたので、周りに頼れない環境がオンライン留学ならではの」と述べ、オンラインだからこその学習への集中度に言及した。

Cは事前の連想項目で「楽しそう」「現地の学生たちが活動的」を挙げ、「自分とは違う」というクラスターにまとめた。インタビューでは「育った環境とか国も違うので、大きな刺激になるんじゃないかなという風に思います」と述べ、活動的なマレーシア人バディと自分との違いについて特に強調した。相手のことを考えすぎてしまい、関わるのが怖いという気持ちを吐露し、事前の連想項目に「怖い」を挙げていた。また英語実習参加前の春学期には、オンライン授業で課題が増えるなどして多忙になり、「忙しさが充実に変えられなかった」こともあり体を壊してしまったという。さらに、講義の中でグループワークが行われたとしても、その場限りの関係性と割り切ってしまうところがあり、人間関係を広げることに苦勞していた。

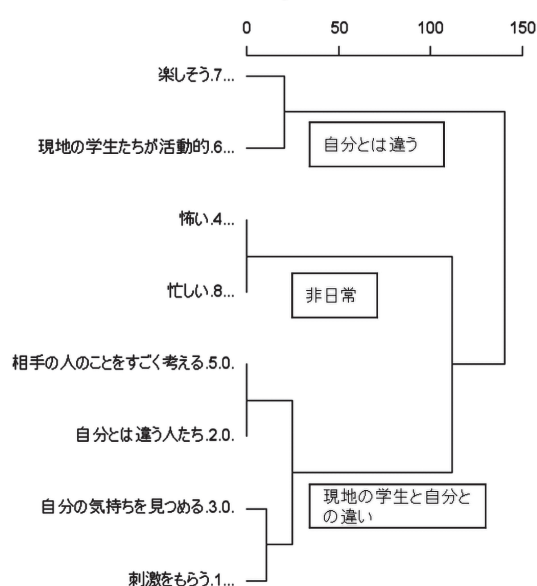


図5：Cのデンドログラム（事前）

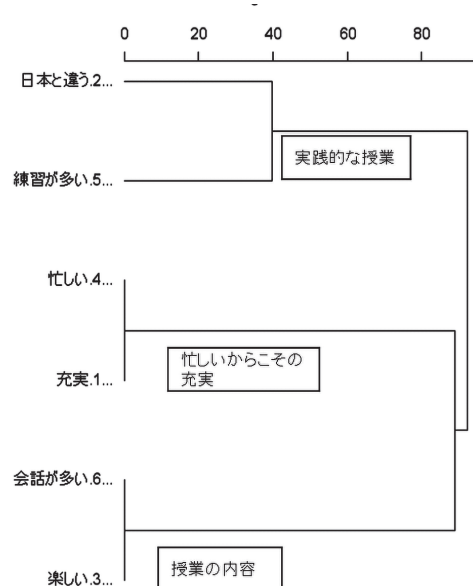


図6：Cのデンドログラム（事後）

事後インタビューでCは、研修参加前は関係性を他人がどう思っているか気にし過ぎていたが、今は自分自身がこの関係性をこのまま続けていきたいと思うようになったという、内面の変化を告白した。事前インタビューで言及したような、育った環境の違いで刺激を受けるのではなく、バディたちが授業などでハードスケジュールな中、自分たちのためにサポートや動画編集をしてくれたことに刺激を受けたという。Aと同様に「やってくれたこと」から受けた刺激に触れた。また、「忙しい」と「充実」を連想項目に挙げ「忙しいからこそその充実」というクラスターにまとめた。インタビューにおいては、「その時は大変だった時間が、今思えば充実してたなって（中略）。締め切りっていう先のことを考えた忙しさではなく、現在にすごいフォーカスして活動するっていうような忙しさ」と話し、事前項目で挙げたような課題に追われるこれまでの忙しさとは異なる、忙しさから来る充実度に言及した。

Dは事前の「世界の広がり」クラスターの連想項目で「コミュニティを広げる」「視野

を広げる」を挙げた。インタビューで「他人のことを知るっていうのはすごい大事にしている、コミュニティを広げるっていうのは単純に言えば人とのつながりを広げていくこと」「何もしてないとか何も知らないっていうのは一番いやだなと思ってるので、新しいことはやるようにしてます」と説明し、活動的な性格をのぞかせた。とはいえ、「対面だとすごい仲良くなる自信がある」としながらも、自分の伝えたいことを身振り手振りも使ってオンライン上で伝えることができるのか心配であるとも言及した。

現地には渡航していないにもかかわらず、事後のクラスターでは「多民族国家マレーシア」を挙げ、連想項目としては「マレーシアの歴史」「宗教」が含まれた。インタビューでは「イスラム教の方々って、他の人に優しくするっていうことをすごい大事にしてらっしゃる方がすごく多い」と述べ、オンライン実習ながら相手の文化について深く理解できたと話した。宗教のセンシティブな部分についても「全然何でも本当に気にしないから聞いていいよって言うてくれて（中略）。異様な変な英語を送りまくっても全然理解して返してくれる」「相手を尊重しながら共存してくってというような考え方がすごい感じられて」と述べ、多民族社会を日常として生きている人々から異文化理解を学んだことが、大きな収穫であることが伺えた。異文化理解による自己分析が進んだことを事後のクラスターとして挙げたが、文献を自分なりに調べ、自分の宗教を説明するための台本を作ったのだという。

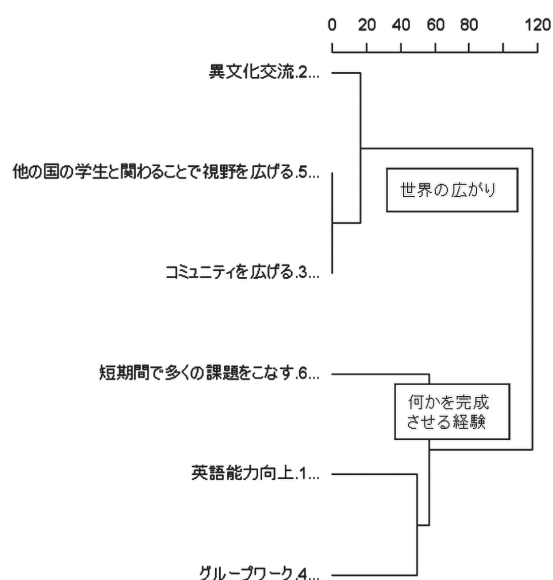


図7：Dのデンドログラム（事前）

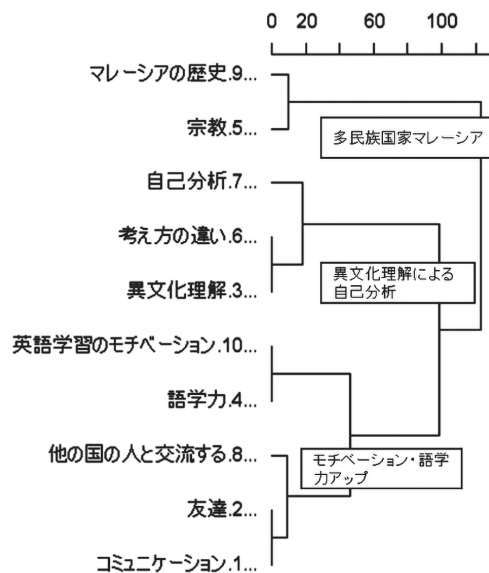


図8：Dのデンドログラム（事後）

Dは3年生の秋学期からマレーシアの大学（USMとは別の大学）へ交換留学した上、東洋大学とは別の日本の大学院でイスラム教に関連する研究を継続することとなった。オンラインコースへの参加が卒業後の進路を左右するきっかけになったと言えるだろう。

6. 考察

前節の4名の事例に他の20名も加え、全体考察を行いたい。本実習においては、バディが撮影した現地の街並み・観光地の動画鑑賞や、プログラム外でもバディと日本側学生がオンラインを通じて夕食や映画鑑賞を共にするなど、バディの役割が非常に大きいことが分かった。そのことによって日本側学生の参加度合いや臨場感が向上したと推察される。現地に足を運ばず、担当教員と物理的に出会わないまま調査を行い、解決策まで考えるPBLが非常に難しく、苦勞したという学生は多く、24名中7名が事後の連想項目にPBLに関連する語句を入れていた（事前にPBLを連想項目に入れたのは3名）。単なるフィールドトリップや学生交流に留まらない、実際にマレーシアや日本に存在する社会課題を解決する方法を一緒に考えるという経験が、現地の人々との密なコミュニケーションにつながったと考えられる。こうした時間の共有により、バディの献身に報いたいという努力が生まれ、グローバル人材の概念の中でも、特に要素Ⅱに含まれる「主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感」（グローバル人材育成推進会議2011）が育まれたのではないかと推察できる。尚、要素Ⅰは「語学力・コミュニケーション能力」だが、語学力についてはTOEICのスコアが24名の平均で38上がっていた。比較できる数字として、佐藤・柏崎（2022）は同英語実習の2018年度参加者89名のスコア推移を実習参加前後で調べているが、スコア上昇の平均は15であった。現地派遣とオンライン1年度分ずつでの比較であるため確定的なことは言えないが、第2節に挙げた先行研究で指摘されたようなオンライン留学における外国語の習熟度の伸長、合理的な学習、教養的価値といった点が、本英語実習でも発揮されたと言えるかもしれない。実際に前節で事例に挙げたBも、オンライン学習における集中度の高さに言及していた。

一方で、連想項目にバディという言葉を入れた学生は、事前ではAを含め24名中3名いたが、事後では1名に減少した。特定の言葉のみならず、イメージの数自体が、事前では平均して8.7、事後では7.0と減少していた。この点については、特に今回はオンラインによる英語実習という、多くの学生にとってこれまで経験がなく、周りに経験者もほとんどいない学習形態であったため、事前にはイメージがわきにくく、こうではないかと想定して言葉を紡いだためと考えられる。実際に参加した後はイメージが明確になり、端的な言葉で表現するようになり、イメージの数自体は減った可能性がある。また当然、バディ以外にも英語チューターや英語教員、PBL担当教員など多くのUSM関係者とオンラインで接する機会があり、バディという言葉は使わずとも、「友情」「友達作り」「仲間」「交流」「気遣い」など、現地側との関わりが密に行われたことが事後の連想項目からは明らかになった。

もう一点、現地に渡航しないオンライン留学であったとしても、日本側だけで良いので対面授業や活動を行うことが重要だと考えられる。上述のとおりBは対面授業によって友人との関わりが深くなった旨に言及したが、他の学生の中にもPBLに関する現地調査

を都内で行った際の出来事に言及した者がいた。SDGsの第8目標である「働きがいも経済成長も」をテーマとし、下町の土産物屋でコロナ禍の影響について調査した際、飛び込みでのインタビューにもかかわらず店員が温かく対応してくれたことに仲間と共に涙した経験を語った。対面授業や調査を取り入れたからこそ、より深く仲間とかわることができ、PBLにおいても机上にとどまらない実社会との結び付きを見出すことができたのではないか。

7. まとめ

これまで、時間的・経済的負担の軽減や、語学力向上を目的とした研修・留学であればオンラインでも効果は下がらないという消極的な理由が、オンライン学習の強みとして挙げられることが多かった。しかし、多様な背景を持つ学生へのチャンスの提供という利点がオンライン留学や研修にはある。オンライン学習は、他の方法では参加が困難な障がいや慢性疾患を持つ学生やマイノリティ学生に機会を提供している (Edwards 2021; Miller 2021)。経済的または身体的・精神的に留学・研修をあきらめていた学生にとっても、オンラインの活用によって道が開けると考えられるものの、その活用方法についてはこれまで十分に検討されてこなかった。オンラインの利点を発揮するためには、本研究で明らかになったようにバディをはじめとする現地側の協力者の関わりや、国内だけでも対面授業を作ることなどの仕掛けが有効であると考えられる。今後、さらに分析を進め、バディの果たした役割や互惠性、学び合いについて考察を深めていきたい。

謝 辞

匿名の査読者2名の先生方には貴重なコメント・ご指摘をいただいた。また、英語実習参加学生には調査に、本学科の卒業生3名には事前・事後インタビューの文字起こしに、それぞれ協力をして頂いた。本研究は、JSPS 科研費 19K14124 の助成を受けたものである。心から感謝申し上げたい。

引用文献

- 井内千紗 (2023) 「消費文化としての大学生の海外短期留学」『拓殖大学語学研究』148号、pp.29-49。
- 池田佳子 (2021) 「コロナ禍期の COIL 型教育とポストコロナ禍期での展開」『大学時報』399号、pp.90-95。
- 石山昭彦 (2023) 「短期語学留学の教育効果—渡航型留学の効果分析とオンライン型留学の考察—」『國學院大學教育開発推進機構紀要』13号、pp.47-56。
- 太田浩 (2013) 「日本人学生の内向き志向再考」横田雅弘・小林明編『大学の国際化と日本人学生の国際指向性』学文社、pp.67-93。

- 太田浩（2018）「日本の海外留学促進政策の変遷」横田雅弘・太田浩・新見有紀子編『海外留学がキャリアと人生に与えるインパクト—大規模調査による留学の効果測定—』学文社、pp.2-28。
- 小澤伊久美・坪根由香里・嶽肩志江（2022）「PAC 分析法における統計処理の留意点—よりよい実施とデータ解釈のために—」PAC 分析学会編『PAC 分析—支援ツールでここまでできる』ナカニシヤ出版、pp.89-102。
- グローバル人材育成推進会議（2011）『グローバル人材育成推進会議 中間まとめ』https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/46/siryo/__icsFiles/afieldfile/2011/08/09/1309212_07_1.pdf（2025 年 1 月 5 日取得）
- 今野博信（2021）「遠隔の教育相談に生かす PAC 分析の遠隔実施」『日本教育心理学会第 63 回総会発表論文集』、p.488。
- 佐藤郁・柏崎梢（2022）「海外英語実習（Learning English Abroad）を振り返って」『国際地域学研究』25 号、pp.127-140。
- 産学連携によるグローバル人材育成推進会議（2011）『産学官によるグローバル人材の育成のための戦略』
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2011/06/01/1301460_1.pdf（2025 年 1 月 5 日取得）
- 末田清子（2001）「留学体験の意味づけ—大学生の留学前及び帰国後の滞在国に対するイメージ分析を通して—」『異文化コミュニケーション』4 号、pp.55-74。
- 土田義郎（2017）『PAC-Assist2』<http://www.kanazawa-it.ac.jp/~tsuchida/lecture/pac-assist.htm>（2024 年 9 月 27 日取得）
- 土田義郎（2022a）「PAC 分析支援ツール PAC-Assist について」PAC 分析学会編『PAC 分析—支援ツールでここまでできる』ナカニシヤ出版、pp.17-28。
- 土田義郎（2022b）「俯瞰夜景の心理的評価への PAC 分析応用事例—フリーの統計処理ソフト R を用いて—」PAC 分析学会編『PAC 分析—支援ツールでここまでできる』ナカニシヤ出版、pp.55-70。
- 内藤哲雄（2002）『PAC 分析実施法入門（改訂版）—「個」を科学する新技法への招待—』ナカニシヤ出版。
- 中川典子（2013）「日本人留学生の異文化接触とアイデンティティ—留学前、留学中、帰国後のイメージ分析を通して—」『流通科学大学論集—人間・社会・自然編—』25 巻 2 号、pp.53-75。
- 中橋真穂（2015）「理工系大学院生のグローバル人材育成に向けた短期海外研修—PAC 分析による参加者の意識変容に着目して—」『グローバル人材育成教育学会』2 巻 2 号、pp.46-57。
- 仲谷ちはる（2022）「短期オンライン留学の意義と課題、そして展望—効果的な「バーチャル留学（バリュウ）」の構築を目指して—」『和洋女子大学 英文学会誌』57 号、pp.77-95。
- 日本学生支援機構（2020）『「海外留学支援制度（協定派遣）プログラムの事前・事後研修に関する調査」報告書』
https://www.jasso.go.jp/ryugaku/scholarship_a/haken/__icsFiles/afieldfile/2021/08/26/29_chosa01_hyousi_mokuji.pdf（2025 年 1 月 5 日取得）
- 日本学生支援機構（2022）『日本人学生留学状況調査結果』

https://www.studyinjapan.go.jp/ja/_mt/2024/04/data2022n.pdf (2025年1月5日取得)

メリアム, S. B. (著) 堀薫夫・久保真人・成島美弥訳 (2004) 『質的調査法入門—教育における調査法とケース・スタディー』 ミネルヴァ書房.

横川綾子 (2021) 「英語発話力向上プログラム (フィリピン) —オンライン化の経緯と現状報告—」 『グローバル人材育成教育研究』 9巻2号、pp.3-9。

横田雅弘 (2013) 「外国人留学生の受入れと日本人学生の国際志向性」 横田雅弘・小林明編 『大学の国際化と日本人学生の国際指向性』 学文社、pp.1-10。

渡部留美 (2009) 「短期海外研修プログラムにおける参加者の体験と意識変容—参加者に対するPAC分析の結果より—」 『多文化社会と留学生交流』 13号、pp.15-30。

渡部由紀 (2022) 「大学の国際化」 異文化間教育学会編 『異文化間教育事典』、p.98。

渡部由紀・新見有紀子 (2022) 「ポストコロナ期におけるオンライン留学の役割と可能性—オンライン型短期留学プログラムの学習成果を踏まえた一考察—」 『東北大学 高度教養教育・学生支援機構 紀要』 8号、pp.23-35。

Broeckelman-Post, M. A., Hawkins, K. E. H., Arciero, A. R. & Malterud, A. S. (2019) Online versus face-to-face public speaking outcomes: A comprehensive assessment. *Basic Communication Course Annual*, 31 (10) , 144-170.

Edwards, A. A. H. (2021) From novel to necessary: Covid-19 and the kairos of bringing technology into the communication classroom. In J. M. III. Valenzano. (Ed.) , *Post-pandemic pedagogy: A paradigm shift*. (pp.66-95) . London: Lexington Books.

Linardopoulos, N. (2010) Teaching and learning public speaking online. *MERLOT Journal of Online Learning and Teaching*, 6 (1) , 198-209.

Miller, E. (2021) *For some black students, remote learning has offered a chance to thrive*. National Public Radio, March 1, 2021.

Expanding Learning Opportunities through Online English Language Program: A Case Study of the “Learning English Abroad” Program in Malaysia

Seiko Fujimoto-Kaneko
(Faculty of Global and Regional Studies, Toyo University)

Abstract: Universities have been developing short-term study abroad programs to cultivate global human resources. The Corona pandemic restricted overseas travel, which made online alternatives rapidly developed. Although online study abroad programs have the advantage of being less time-consuming, low financial burden, and the degree of foreign language acquisition is not lower than face-to-face programs, methods to enhance their effectiveness have not been fully explored. In this study, using a five-week online English learning program with a Malaysian university as a case study, the author explored the method of conducting online study abroad program through Personal Attitude Construct analysis and interviews. The results revealed that the Japanese students may have grown by trying to respond to their buddy students' dedication and support. Online study abroad programs may contribute to enhancing the academic experience of students with diverse backgrounds through the involvement of local collaborators such as buddies, and by providing opportunities for face-to-face classes even if only on the domestic side.

Keywords: Learning English Abroad, online, buddy, Malaysia, Personal Attitude Construct